

## 「2023年度国立台湾大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学文学部1年 溝脇 光里

## 【学習成果】

今回の台湾留学は、たった三週間であったが、本当に密度の濃い充実した経験であった。短期間であるからこそ、初めて出会う物事や人々、そして考え方全てに対して興味を持ち、理解し受け入れようとしたからだと思う。このような姿勢で生きることで、自分の世界が大きく広がることに気がついた。もちろん語学力も上達したが、この気づきは、それ以上に大きな収穫であったと思う。またこのプログラムに参加したことで、様々な人と出会うこともできた。台湾大学の学生や現地の方だけでなく、シェアハウス形式の宿舎では世界各国からの方達と出会い、日常会話から、時には政治の話まで話した。そして何より、同じ京大からの参加者の皆と出会えたことも大きな収穫である。みな、それぞれ違う角度から国際社会に興味があり、時には、宿舎の共用スペースで朝の5時半まで様々なことについて議論し、語り合うこともあった。このように、現地で生活しながら、日本国内外の人々との会話を通じて、日本という国を外側から見て考えるということが初めてできた。

## 【台湾での経験】

台湾には一度旅行で行ったことがあったのだが、今回私が感じた台湾は旅行で感じた台湾とはかなり違っていた。旅行よりも期間が長いというのもあるが、留学という性質上、現地の方との交流や、その生活の一部を実際に体験する機会が圧倒的に多かった。例えば、地元の人がよく行く朝ごはん屋さんで食事をし、公共交通機関を用いて自力で移動し、先々では現地の人とたくさんお話しした。このプログラムを通して、台湾を観光地としての側面だけではなく、多面的な視点で再認識することができたと思う。またこの点において、現地の言葉を少しでも話せる、聞けるというのが非常に重要だ、ということにも気付かされた。現地の言葉を全く知らなくても、英語と翻訳機で生活することは可能だ。だが、その国の言葉で現地の方と話してみないと得られない感覚があることに気がついた。

## 【プログラム内容】

平日の午前中には毎日、中国語の授業があった。授業は全て中国語で進み、最初は聞き取るのにも苦労したが、それも徐々に慣れていき、最後の方はすんなりと先生の説明が耳に入ってくるようになった。日本での授業とは違って、聞いて話すことに重きが置かれており、授業中何度も中国語で自分の考えを話すよう求められた。これも最初は全くと言って良いほど言葉が出てこなかったが、徐々に慣れていき、自分の知っている言葉と文法を使ってなんとか言いたいことを表現できるようになった。課題も教科書の音読や、午後に行った場所でビデオを回して中国語でその場所の説明をする、などやはり話すことに重点が置かれていた。午後の自由時間や休日は、まさに授業のアウトプットの時間であった。実際に街に出て中国語を聞いたり、お店で注文をしたり、現地の方と話したりすることで、より実践的な中国語力が身についたと思う。

平日の午後には、台湾についての講義や、文化体験、校外学習もあった。龍山寺や故宮博物院などの、いわゆる観光地に行くにしても、英語で詳しい説明を受けることができたので、台湾の文化を深く理解することができた。また3,4日に一回、台湾大学の学生チューターによる tutor station があった。中国語の勉強やプレゼンテーションのサポートだけでなく、同じ大学生として気軽に話ができて、台湾の若者の文化や価値観に触れることができた。このように、全体的に非常によく組まれたプログラムであり、語学の面だけでなく、新しい文化に触れそれを理解するという面でも非常に有意義な、密度の濃い時間を過ごすことができた。このプログラムに携わった台

湾大学の program manager や学生チューターの方々に、本当に感謝している。

【進路への影響】

今回の台湾留学は、当初は主に語学力の向上を目指して応募したのだが、実際に参加してみると、先に述べたように様々なものが得られた。今後も語学学習だけでなく、自分の視野を広げるためにも、積極的に海外交流イベントや、留学プログラムに参加しようと思う。また日本での大学生活も、台湾にいた時のように様々なことに興味を持って積極的に行動することで、自身の世界を広げたいと考える。